



TITLE:

<大會抄録>後期オスマン帝國の徵 税請負制に関する豫備的考察

AUTHOR(S):

永田, 雄三

CITATION:

永田, 雄三. <大會抄録>後期オスマン帝國の徵税請負制に関する豫備的
考察. 東洋史研究 1995, 54(3): 558-559

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154529>

RIGHT:

盾した内實は胡漢對立の上に立つ至高な存在としての皇帝の追求という點で統合されていたことを指摘する。さらに崔浩事件の主因を考える際にもこうした帝權の性格を考えることが必要なことを論じ、そこに至る足掛かりとして事件の主因を民族間の矛盾に求める從來の定説では十全なる解答をなしえない疑問點を提示し考察する。

一四世紀イランにおける統治者の權威

——ムザッファル朝の場合——

岩 武 昭 男

イルハン、アブーサイード歿（一三三五年）後の混亂期に、イランの中南部を支配したムザッファル朝に關しては、これまで、ペルシア文學史において詩人ハーフィズとの關連か、もしくはイルハン朝史、ティムール朝史の前後の餘録としてのみとりあげられてきた。しかし、前者の見方に關しては、不十分な研究に基づく概説に過ぎず、後者の視點に關しては、イルハン朝のモンゴル支配とサファヴィー朝の成立を短絡的に結び付け、この時代を全般的に無視する傾向が強かったためであつた。

イルハン政權のアラブ系アミールの子ムバーリズディーン・ムハンマドが自立して成立したムザッファル朝政權は、イラン中南部の諸都市を順次掌握し、一時的ながらタブリーズをも制壓してイルハン後繼王朝のジャラーイル朝と拮抗する勢力に成長する。次代の

シャー・シュジャールの時代には、その權力がより確實なものとなる。兄弟間の對立が絶え間なかったものの、ティムール到來前のイランにおける最大勢力となつていたといえる。

今回の報告では、アッバース朝カリフへのバイア（臣從の誓約）など、この王朝が二代に亘つて行つた、イスラム政權として自らを權威づける政策を整理し、一四世紀イランにおけるイスラムと政權のかかわりに關し、近年研究の進みつつあるスーフィズムの展開とはまた異なつた展開を提示してみたい。

後期オスマン帝國の徵稅請負制に關する豫備的考察

永 田 雄 三

オスマン帝國史は、一六世紀末を境に前後二つの時期に分けられる。これまで一五・一六世紀の最盛期と一九世紀半ば以後の近代史とに研究が集中し、一七世紀から一九世紀半ばにいたる二五〇年ほどの時期はきわめて手薄であつた。しかし、近年この時期に關する諸問題が關心を集め、本格的な研究の進展が期待されている。社會經濟史分野では、とりわけ「チフトリキ」（「私的大土地所有」）の發生、發展、經營規模、農産物の市場化、そして、これらを經濟基盤として各地に勃興した地方名士（アーヤーン）層の動向などが注目されている。報告者もこれまでアーヤーン研究をそのチフトリキ經營を中心に進めてきたが、本報告では、アーヤーン層の權力基盤のいまひとつの焦點である徵稅請負（イルティザーム）を取り上

げる。これは、イスラム史上において古くから存在していたが、一七世紀以後のオスマン帝國においてもっとも廣範に適用され、一八世紀にはほぼすべての税がこれによつて徴收されるにいたつた。このように重要な研究分野であるにもかかわらず、徴税請負制研究は初歩的な制度史的事柄をのぞいては、いまだ未開拓なままに放置されている。報告では、一七世紀初頭のダマスカスとその近郊に関する徴税請負臺帳、一九世紀前半の西アナトリアのアーヤーンに関する史料などを手がかりに、この制度にまつわる諸問題の所在をますます明らかにすることにした。

マクリーズィーの寫本 *Kitāb*

al-Durar al-Mudīya について

佐藤 次 高

ダマスクスのアサド圖書館には、アレppoのアラブ科學史研究所所藏のアラビア語寫本七〇〇點餘りがマイクロ・フィルムの形で收められている。一九九三年の秋、在外研究の折に、私はこのマイクロ・フィルム史料を調査する機會を得た。コレクションの多くは自然科學にかんするものであるが、そのなかにマムルーク朝時代のエジプトの歴史家マクリーズィー（一四四二年歿）による史書『イスラーム史の中の過ぎ去った眞珠』*Kitāb al-Durar al-Mudīya fi Ta'riḥ al-Duwal al-Islāmiya* が收められている。ウマイヤ朝の成立からアッバース朝の滅亡（一二五八年）までを對象とし、最

後にカイロのアッバース家カリフの事蹟が附け加えられている。

Kitāb al-Mawā'iz wal-Tiḥār bi-Dhiar al-Khiṭat wal-Āḥār, *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifa Duwal al-Mulūk*, *Kitāb al-Muqaffa al-Kabir* をはじめとしてマクリーズィーの著作は數多く知られているが、この *Kitāb al-Durar al-Mudīya* はこれまで研究者によつて利用されたことはないようである。また、マクリーズィーが、これ以外にイスラーム史の全體を見渡す歴史書を著わしたことも知られていない。報告では、この寫本の性格を多角的に検討し、あわせてイクターについての記述にも言及したい。

地方財政の軟らかな解決

岩井 茂 樹

萬曆三五年（一六〇七）、黄河の南岸に位置する河南省歸德府虞城縣で「軟擡」と名づける地方經費支辨の方法が實施された。これは谷口規矩雄氏が紹介され、一條鞭法において適切な改革を見ずに實役として残つた驛馬、河夫、大戸などの徭役の經費を一括計算し、「全縣の戸に均等に割り當てる」趣旨のもとに發案された制度であり、その具體的内容は不明だと論じられたものである。

この制度の發案者かつ命名者である楊東明なる人物は、虞城縣出身の進士。東林黨の人士とともに講學にはげむ一方、呂坤とも深い交友をもつていた。彼は、また縣内に「同善會」を組織したり、築堤、城壁修築、救荒、義學設立などの活動に盡力するなど、地方公